

因果的決定論の科学史と近代心理学の成立

P. ジャネのハーヴァード講演と精神分析理論の成立

History of Causal Determinism and Formation of Modern Psychology

H.-A. Taine's Acceptance of Hegel's thought and P. Janet's Harvard Lecture

大 藪 敏 宏
OYABU Toshihiro

1. はじめに カッシーラー・テーゼと決定論の概念史

現代の科学史・科学哲学研究においてすでに最高度の評価を獲得しているハッキング『偶然を飼ひ慣らす』(1990年)という偶然性をめぐる科学史的研究の中心にあるのは、19世紀後半を中心とする「決定論の浸食(erosion of determinism)」である。そしてこのハッキングの研究の主張は、この決定論の浸食という転換と社会の統計化という転換とが関連して生じたというものである²。19世紀後半における決定論の浸食を直接的に扱っているのは、第18章の「カッシーラーのテーゼ」であり、そこで決定論概念を、(1)1789年頃からドイツだけで用いられた「十分な内的理由によって意志を決定する原理」という意味での意志の決定論と、(2)「必然性の教義」³である「因果的決定論」⁴とに分類している。ところで、今日において使われる意味での決定論概念となったのは、(2)の因果的決定論の意味での決定論概念の方であり、カントやヘーゲルが使用した(1)の決定論概念⁵はほぼ忘却されている。そして今日において主流となった(2)の方の決定論概念の成立の年代決定について、カッシーラーのテーゼが主張しているような1872年ドイツでのエミール・デュ・ボワ・レイモンの「発明」によるという年代決定ではなく、ハッキングはエルンスト・カッシーラーの科学史研究(カッシーラーはその研究の詳細さにおいても他を圧倒し群を抜いた科学史・科学哲学研究者でもあったのだが)をも上回る詳細な文献学的な調査によって1850年代のシャルル・ルヌーヴィエの著書にまで遡るべきであると、「決定論」の科学史を訂正している⁶。しかし、このように整理してみると、決定論概念が成立するとともに、「決定論の浸食」が始まっているということになる。

そしてさらに、20世紀の量子力学の成立とともに、決定論は決定的に過去のものになる。ところがこのカッシーラーの研究自身が1936年のものであり⁷、まさに非決定論を組み込んだ1930年代の量子力学の水準を前提にして、この新しい量子力学によって時代遅れの死亡宣告を受けた因果論的決定論それ自身が、わずか50~60年ほど前に成立して、あっという間に死亡したということをも主張しようとしたものになる⁸。

ところがハッキングのこの科学史研究を、さらに綿密に追跡してみると、次のような衝撃的な記述に出会うことになる。つまり今日的な因果論的決定論における最も初期の用例としてハッキングがカッシーラーに抗して遡及したルヌーヴィエの文献を引用して、ハッキングは次のように述べているのである。「新カント派のルヌーヴィエは、ここで積極的な議論に移る。究極原因が科学から放逐されたときのように、今や我々は結果を生みだす原因をも放逐し、ついでに普遍的決定論という考えも捨て去る段階に来ていると。ルヌーヴィエは、これほどまでに決定論の浸食を押し進めていた。まさにパースの先駆けであった」⁹。ということは、決定論概念の最も初期の用法において、この概念は否定し「捨て去る」ために用いられているということになるのであ

る。ということは、この因果的決定論という意味での今日の決定論概念は、その出生の当初から、批判し「捨て去る」ための非難用語として成立したのだったのである¹⁰。つまりルノーヴィエは、1850年代の新カント派のカッシーラーなのである。逆に言えば、1930年代の新カント派のカッシーラーは、1850年代の新カント派のルノーヴィエの量子力学ヴァージョンなのである。

1930年代において新たに「浸食」したと云う「決定論」とは、実は量子力学的な新たな時代に直面して、それまでの比較的安定していると思われた世界観の崩壊感覚に直面したときに、実は、この世界崩壊の感覚というトラウマの全責任を遡及的に誰かに負わせて「捨て去る」ために、「回顧的な再構成(retroactive reconstructions)」¹¹によって幻想された亡霊なのである。

2. 決定論の浸食と多重人格の急増

今日において忘却された(1)の意味での決定論概念こそが、ヘーゲルにおいて取り上げられて批判的に吟味されたものであった。しかし、今日においてはヘーゲルは(2)の因果的決定論の代表的哲学者として、つまり過去の遺物として今日においても神経症的な反復において熱狂的に葬り去られ続けている¹²。ところが、こうした決定論に関する詳細を究めたハッキングの科学史研究『偶然を飼いなす』は、コンドルセからラプラス、ガウスからケトレ、コント、ドストエフスキー、ニーチェ、デュルケム、パース、マラルメにまで言及しながら、近代哲学の決定論的世界観の権化とみなされることの多いヘーゲルについては、微妙に記述を回避している。また、アナンケー(必然)やテューケー(偶然)について取り上げることの多かったフロイトの深層心理学も、ハッキングのこのこの浩瀚な科学史研究に登場するわけではない。ここでもう一度ハッキングの決定論をめぐる偶然性の科学史研究に立ち戻るとき、ひとつの疑問点が浮上する。疑問点とは、さきほどのハッキングの研究の中心が19世紀後半の「決定論の浸食」であったにもかかわらず、その頃の最も重要な決定論の思想家と通説的に位置づけられているイポリット・テーヌが一度も登場していないことである。このテーヌこそが、実はヘーゲルとフロイトとをつなぐ重要な思想家としてハッキングの偶然性研究に登場するのは、ハッキングの多重人格研究である『記憶を書きかえる』(1995年)である。

この著は、その副題「多重人格と記憶の諸科学」に明示されているとおり、多重人格をめぐる研究である。そもそも1990年にCambridge University Pressから偶然性と統計学史をめぐる本邦でも最高級の評価を得た研究を発表したハッキングが、なぜ1995年にPrinceton University Pressから多重人格と記憶に関する研究を出版するのかという必然性を、私たちはすぐに理解し納得することができるであろうか？いまやトロント大学の科学史科学哲学研究所の老大家となった科学哲学者ハッキングは、恣意的な興味のおもむくままに興味半分の著作を出すようになってしまったのだろうか？第一印象ではそうした誤解を生みかねない危うさを感じかねないような表題と原書の装丁であるが、実はそうではない。本稿では、コレージュ・ド・フランスの心理学主任教授としてのピエール・ジャネが1906年にハーヴァードで行った講演を手がかりに、この事情を先ほどとりあげたイポリット・テーヌとの関連の中で考察してみたい。

思想史の今日の通説的理解においては、イポリット・テーヌは、心理現象を物理現象と同様に因果的必然性をもつものと考えて、複雑な現実も分析によって本源的な原因に還元可能であり、この本源的な原因から現実を一元的に説明することができるという決定論を唱えた19世紀後半の決定論の大家として位置づけられている¹³。それは時代遅れの思想家として今日顧みられることはなくなり、テーヌは文学史家としての該博さが評価される以外では忘れ去られた思想家とも言える。このテーヌこそは、まさに19世紀後半において決定論を積極的に展開した思想家として、ハッキングの「決定論の浸食」研究において大きく取りあげられて、まさに反面教師的な役割を担わされて登場してもよさそうな人物である。つまり『偶然を飼いなす』の13章で揶揄された「19世紀の最も偉大な<正規性を売り歩いた男>アドルフ・ケトレ」や、コントへの影響が19章で取

りあげられる「正常状態」の概念を發明した F.-J.-V.ブルセとともに、テーヌもまた浸食されていった決定論という過去の遺物を 19 世紀後半に奉じていた人物として揶揄的に取りあげられそうな人物と思われるが、この『偶然を飼いなす』では取りあげられていないのである。ケトレやコントやブルセだけでなくコンドルセやラプラスからニーチェやデュルケームやパースやマラルメまで取りあげられた偶然性と決定論に関するこの科学史研究でテーヌが取りあげられなかったことに注意を向けることが、1990 年代におけるハッキングの一連の科学史研究を理解する際の隠された重要な鍵である。19 世紀決定論の失われた環となったテーヌこそが、ハッキングの偶然性研究と多重人格研究とをつなぐ重要な媒介項となる。

このテーヌは、実は『記憶を書きかえる』で、むしろ多重人格が取りあげられる枠組みを生みだした記憶の心理学、つまりは 19 世紀後半におけるフランスの心理学界を生み出した立て役者として、揶揄的ではなく、逆に決定的に重要なキー・パーソンとして登場している。ここでまたハッキングは当代一流の綿密な科学史研究者としての腕前を見せながら、この時代において哲学からコントによって社会学が分離していく有り様を意識しながら、1870 年代のフランス第三共和制下において哲学から心理学が分離していく思想のダイナミズムを見事に描き出している。繰り返しになるが、通説的には決定論者の代表的思想家と見なされているテーヌは、ハッキングの科学史研究においては、そうした単純な思想史観から離れて、フランスにおける心理学の成立を促した最重要人物として取りあげられているのである。

『偶然を飼いなす』が 19 世紀後半における「決定論の浸食」を準備した「印刷された数字の洪水(an avalanche of printed numbers)」¹⁴に注目するのに並行するように、『記憶を書きかえる』は、同じ 19 世紀後半における多重人格症例の突然の激増に注目している。特に「1875 年以降のフランスの多重人格の隆盛」に注目する。『偶然を飼いなす』で取りあげられたラプラスからケトレ主義の影響¹⁵やルヌーヴィエやブートルーとブルセを経てコントやデュルケームに至るフランスの科学史が「決定論の浸食」運動の中で近代社会学を生みだしていくのと並行するように、『記憶を書きかえる』では 19 世紀後半のフランス第三共和制下の「1875 年以降のフランスの多重人格の隆盛」¹⁶が近代心理学を生みだしていく歴史的経緯を当代随一の詳細な科学史的研究によって解明していく。つまり 19 世紀後半において哲学から社会学と心理学とが分離していったということは既に知られていることであるが¹⁷、その背景に統計学における「決定論の浸食」と第三共和制下における「多重人格」現象への注目とが、まさに同時代的な並行現象として存在したということを解明したことに、ハッキングの 1990 年代の一連の科学史研究の比類のない意義があるはずである。しかしハッキング自身によつては、この「決定論の浸食」と「多重人格」の登場とはそれぞれ別個のものとして研究されており、両者の並行的な同時代性もつ科学史的(あるいは言語共同体的)必然性がハッキング自身によつて明確に指摘されているわけではない。しかし、だからこそ、この両者の同時代性に注目する必要がある。この同時代性と相互関連性に注目する時のみ、ハッキングの『偶然を飼いなす』から『記憶を書きかえる』への研究動向を内在的に理解することができるようになるからでもある。

フランス第三共和制(1870~1940)が始まって半年後、まだパリ・コンミュン(1871 年)の混乱が続く。このパリ・コンミュンの期間中に行われたライプチヒ大学の G.F.クナップの講義の言葉が、ハッキング『偶然を飼いなす』の 15 章の冒頭で引用されている。この言葉こそが、「決定論の浸食」と「多重人格」の科学史への登場との同時代性を理解する上での鍵になるので、引用しておこう。「フランスの学派は、常にその創始者であるケトレが天文学に没頭していたことの影響下にあった。したがって人間というものを、自由意志を持たず、外部に存する独立した何らかの力に従うと考えた。さらに人間の方ではこの力を知らないために、いまなお責任の体系の中にとどまっているというのである。これに対してドイツ学派は...」¹⁸。ここには、明らかにフランスで定着した統計的決定論(ケトレ主義)に対する批判を、特に意志や自由に関わるドイツ的な決定論の視点から行おうとしていることが読み取られる。このことがフランス第三共和制下における「多重人格」の登場と隆盛が与えた科学史への影響を理解する際のヒントを与えることになる。クナップはフランスのケト

レ主義がパリ・コンミュンの混乱を生み出したという危機意識のもとで、ケトレ主義への批判を行っているのである。

3. ヘーゲルによって修正された実証主義とトラウマ心理学の成立

では、この「多重人格」とフランスにおける心理学の学問的成立との関連の問題に目を向けてみよう。そしてそこでどのように、「決定論」の代表者テーヌが、ひいてはその問題がヘーゲルやフロイトと関係するのかを、見てみよう。

では、なぜフランス第三共和制下なのだろうか？フランス第三共和制下の「1875年以降のフランスの多重人格の隆盛」とハッキングが繰り返し表記する根拠は何か？デュディス・ハーマンはトラウマへの探求の最初のもので19世紀後期フランスのヒステリー研究として、このフランスのヒステリー研究を「カトリック教会が教育、医療などの俗界を支配するのに反対する政治運動の中から現れて発達した」¹⁹と解説している。この政治運動が「第三共和政」の政治運動と関連していることは明らかである。こうした政治状況下で、ウジェーヌ・アザムが「1875年の春の、記憶の“奇怪さ”についての会話」において、フランスにおける古典的な二重人格者フェリーダ・Xについて、報告したのである。このフェリーダについて、コレージュ・ド・フランスの心理学主任教授であるピエール・ジャネが、次のように1906年のハーヴァードでの講演で述べていることは、重要である。「フェリーダを紹介することをお許し願いたい。彼女は、思想史においてかなり重要な役割を演じた非常に注目に値する人物であります。このつつましい女性が、テーヌとリボの師匠の役割を果たしたということ、忘れてはなりません。彼女の病歴は、クーザン学派の唱えるスピリチュアリズム的教義に対して、英雄的な闘争が行われた時代に、実証主義的心理学者が最大限に利用した論拠となりました。フェリーダがいなければ、コレージュ・ド・フランスの教授職も、私が、この場でヒステリー患者の精神状態についてみなさんにお話しする機会も、なかったのではないのでしょうか」²⁰。ここでキーワードは、「テーヌ」「リボ」「クーザン学派の唱えるスピリチュアリズム的教義に対して、英雄的な闘争が行われた時代」「コレージュ・ド・フランスの教授職」等々である。

まず、「クーザン学派の唱えるスピリチュアリズム的教義」に対して行われたという「英雄的な闘争」とは何であろうか？これは19世紀後半におけるフランスの哲学界におけるヘーゲル哲学の受容をめぐる思想的な「闘争」、この忘れられた思想闘争を掘り返さなければ、このジャネの言葉は理解できないし、ヘーゲルからテーヌを経てフロイトに至る精神史も理解できないし、今日的なトラウマ(心的外傷)概念の成立する経緯や概念的必然性も、そして第三共和制下における近代心理学の成立の歴史的事情も理解不可能になる。この時期のフランスの哲学界において支配的であったものは、七月王政のもとで文部大臣を務めたこともあるヴィクトル・クーザン(1792～1867)の哲学思想であり、つまりはデカルトやメーヌ・ド・ピランやスコットランド学派やヘーゲルを中心とするドイツ観念論などの折衷哲学であり、唯心論的形而上学とも呼ばれていた。神や魂やアイデアといった霊的な存在は人間の観念から独立して客観的に実在していて自律しているというのが、当時支配的なクーザン学派の思想であった。この思想は、スピリチュアルな存在は自律的であるがゆえにそれは観念を内省することによって接近できると考えたために、コント以来勃興しつつあった実証主義的にデータを集めることに理解を示すことができず、「人間の思考と行動に関する決定論に抵抗した」²¹のである。

こうした当時まで主流であった折衷スピリチュアリズムに対して反旗を翻したのが、第三共和制が始まった年に出されたテーヌ(1828～1893)の『知性論(De l'intelligence)』(1870年)である。クーザン学派の折衷スピリチュアリズムが決定論に抵抗したのだとすれば、クーザン学派に反対したテーヌは決定論の陣営ということになるのだろうか？なるほど通説的にはテーヌはこの時期における決定論の最大の大家ということになっている。ところがハッキングは、そうした通説的な整理を慎重に避けながら、テーヌの立場を「ヘーゲルへの没頭

によって修正された実証主義(positivism modulated by an immersion in Hegel)」と位置づけている²²。コントの実証哲学は第三共和制においてようやく広がりを見せる。それまでの折衷スピリチュアリズムが決定論とともに実証主義も採用しないで内観的な経験主義の折衷にとどまっていたところから、共和制と結びついた実証主義の時代への飛躍をテーヌの立場は示していることになる。それは実証的な事実にもとづこうとする実証精神と結びついた第三共和制の政治運動と結びつくことによって、やがてフロイトの精神分析学の成立へと繋がるフランスのヒステリー(トラウマ)研究を生みだしていくことになるのであるが、それはハーマンが1970年代におけるトラウマ研究がフェミニズムやベトナム反戦運動といった政治運動と結びついていたこととの並行関係を指摘していることと同様である²³。そしてテーヌは、客観的に自律したそれ自体で独立した精神や魂という折衷スピリチュアリズムに反対したのである。つまりは人間意識の実証的な事実から客観的に独立して存在する「自我」観念を、テーヌは形而上学的なドグマとして否定する。つまり「自我が現象界の因果律に服従しない、本体的な自我であるという自由意思問題への康トの解決方法に、テーヌは異議を唱えたのである。テーヌは、ヘーゲルのように自我を歴史とともにある存在と考えた。そしてロックのように、意識と感覚と記憶の複合体によって構成される個人と考えた。だから1876年に二重人格の問題が大きく取りあげられるようになると、テーヌは喜んだ²⁴」のである。康トの場合には諸義務の衝突はありえないという問題領域で考察した(康ト『人倫の形而上学』参照)のであるが²⁵、ヘーゲルの場合にはその法哲学にあるように異なる社会的文脈における諸義務の衝突の可能性のありうる問題領域で考察した(あるいは『精神現象学』における有名なクレオンとアンティゴネーとの対立非和解の弁証論は、まさに人間の掟と神の掟という異なる複数の文脈におけるそれぞれの諸義務の衝突)²⁶。康トの問題領域においては人間の経験的な意識から自律した「目的の王国」における調和に感銘することができたが、ヘーゲルの問題領域においては、諸義務の裂け目に傷(トラウマ)つき倒れる人間の現象学と付き合わなければならなかった。

しかしクーザン流のヘーゲル理解は、今日でも死んでいるわけではない。しばしば云われるようにヘーゲルの「(世界)精神」概念は個人精神の死を踏み越えて、むしろそれを道具として用いながら自由の理念を実現するという「理性の狡知」的側面において、確かに経験的な人間意識から客観的に自律している側面をもっているがゆえに、クーザン的スピリチュアリズムのヘーゲル理解は、今もなお定着しているといってもいいであろう。このヘーゲル哲学の側面は今日において目的論的哲学説の思弁的形而上性として批判されることであるにしても、こうしたヘーゲル精神概念の理解は一応、客観主義的ヘーゲル受容として位置づけることができるであろう。これに対して、経験的な人間意識から客観的に自律した常に同一的な自我の理念に対してむしろ批判的で、ヘーゲルの歴史の中にある自我理性の現象学的発展として自我を理解するテーヌのようなヘーゲルの精神概念の理解は、主観主義的ヘーゲル受容として位置づけることができるかもしれない。1870年のテーヌの『知性論』が「共和制的な実証主義」²⁷と結びつく形で、七月王政期的な折衷スピリチュアリズムを葬り去ろうとする中で、「1875年以降のフランスの多重人格の隆盛」が、にわかに多重人格を取りあげ、そしてヒステリー患者を火刑台から治療の場へと取り戻し、やがてトラウマ概念を成立させていくことになる。つまりトラウマ概念の前史は、コント的な実証主義と関連した形での、ヘーゲル精神概念の客観主義的受容と主観主義的受容との間の「英雄的な闘争」(ジャネ)を通じての、前者から後者への新旧交代という意味を持つのである。フロイトの精神分析学が登場するに至るトラウマの前史は、こうした政治運動と結びついた思想闘争によって準備されていたのである。いわば、ヘーゲル精神概念のテーヌ的な主観主義的受容(心的外傷に傷つく弁証論的自我発展の論理)がクーザン流スピリチュアリズムの客観主義的受容(持続的な揺るぎない自律的同一的自我精神)を、第三共和制的な実証精神によって克服しようとするとき、この同一の自我に対して、フェリダという「二重人格」の登場は、「クーザン学派の唱えるスピリチュアリズムの教義に対して、英雄的な闘争が行われた時代に、実証主義的心理学者が最大限に利用した」まさに実証的で経験的な「論拠」、つまりトラウマ的なマテリイないし客観的対象となったのである。それはまさに科学史が、自らの転移の対象を発見したときでもある。

「二重人格」は、まさに揺るぎない自律的同一の自我精神(同一人格)に対する実証的な反証になるからである。実際にテーヌは『知性論(*De l'intelligence*)』(1870)の中で二重人格について次のように述べており、そしてさらにピエール・ジャネはその博士論文『心理自動症(*L'automatisme psychologique*)』(1889)の中でそれを引用していた。「同一個人に同時に二個の思考(*pensees*)、二個の意志、二個の明確に異なる行動が共存する。一方は意識的、他方は無意識的であって不可視の存在に帰着する」²⁸。

こうしてみれば、テーヌもヘーゲルもフロイトもそれぞれ別個にしばしば決定論者として非難されてきたことも、実は連関のあることとして理解可能になるのであるが、しかし同時にケトレ等の決定論に対してあれほど辛辣であったハッキングがこの三人を決定論者として通説的に単純に整理してしまうことを慎重に避けようとしていることも注目される。

それでは1906年のピエール・ジャネのハーヴァード講演に戻って、その中でまだ説明されていないで残っているキーワードの「リボ」と「コレージュ・ド・フランスの教授職」について触れてみよう。このピエール・ジャネは後にフロイトの精神分析理論の先駆者と位置づけられるようになるし、あるいはフロイトはジャネの理論を剽窃したのではないか、というような議論すら出たことがあるほどの重要な先駆的心理分析学者であるが、自分の叔父である哲学者ポール・ジャネの影響下にあった。

ポール・ジャネは、1860年にヘーゲル哲学に関する論文を書いているが²⁹、その中で『哲学的諸学のエンテュクロペディー』第3部「精神哲学」における心理学と現象学との間のヘーゲルによる区別をポール・ジャネは変更して、心理学を現象学として、つまりは発展する歴史的存在としての人間精神の学として心理学を構想し直そうとしている。ヘーゲル『哲学的諸学のエンテュクロペディー』の第三部「精神哲学」において「現象学」「心理学」に先立つ「人間学」の中で、実は動物磁気や精神錯乱や夢遊病などが関わるさまざまな精神病理学が展開されていたのである。このポール・ジャネは、フランスにおける最高の教育機関であるコレージュ・ド・フランスの自然・国際法教授席を実験・比較心理学教授席に変更するために、フェリーダなどの二重人格症例に関する論文を書いた。これが功を奏してコレージュ・ド・フランスに心理学の教授ポストが設置されて、そのポストにテオデュール・リボが就くのである(1888~1896年)。このリボは既に進んだイギリスの連合心理学とドイツの実験心理学を紹介しており、近代フランス心理学の基礎を築き、フランスにおける実験的科学的心理学の祖と云われるようになる。このリボの弟子であるピエール・ジャネがやがてそのポストの後任者となって、コレージュ・ド・フランス心理学主任教授(「学問の世界で最高の権威ある地位(*the most prestigious academic site*)」ハッキング³⁰)として1906年にハーヴァードで講演することになったのである。その講演の中で「フェリーダがいなければ、コレージュ・ド・フランスの教授職も、私が、この場でヒステリー患者の精神状態についてみなさんにお話しする機会も、なかったのではないのでしょうか」と言ったのは、以上のような経緯を率直に述べたものだったのである。つまりフェリーダという二重人格の実証症例が「1875年以降のフランスの多重人格の隆盛」の嚆矢として大きく取り上げられることなしには、フランスの最高学府において実証的な現代心理学の教授ポストが設置されることはなかったであろうし、そうなればそのリボの後任にジャネがなることもあり得なかったであろう、と精神分析理論の先駆者とも云われるピエール・ジャネが述べていることが注目される。こうしたフランスの独自の精神史が、フランスでトラウマ心理学を生みだすことになる。

4. トラウマの概念史 H.テーヌ~T.リボ~P.ジャネ~A.ピネ~S.フロイト~W.ジェームズ

こうしてみると、フランス第三共和制下の「1875年以降のフランスの多重人格の隆盛」とは、フランスの新しい哲学動向が現代的な実証的心理学を生みだす科学史の運動に付随した社会的現象にほかならなかったのである。そしてヘーゲルの精神概念の主観主義的受容という哲学的運動の中で生みだされたテーヌ、リボ、ジャネという系譜の中で成立したフランスの新しい実証的心理学がイギリスやドイツやアメリカにおける新しい

実証的心理学と異なる特徴は、催眠術の多用と多重人格運動の中でトラウマ概念を発見的に創出したということである。このヒステリー治療に使用されていたフランスの催眠術療法とともにフランスの独自のトラウマ心理学をドイツ語圏に持ち帰るのがフロイトであり、これによって生みだされたフロイトの精神分析の故郷はヒステリー研究である、と云われるようになるのである。

つまり、新しいヘーゲル理解が新しい共和主義精神と新しい実証主義精神と結びつきながら古いヘーゲル理解を克服しようとする中で、フェリーダという多重人格の症例が、客観的に自律した精神の同一性という古いヘーゲル理解に対する実証的な反証(アドルノ「対象性の優位」)として「発見」されたことによって、フランスの実証的な新しい心理学が古い観念的な哲学的心理学から独立して確立したのである。旧いスピリチュアリズム哲学に対して第三共和制の実証主義的精神と結びついた新しい哲学の刷新運動が開始されたときに、多重人格症状に苦しんでいた「かのつつましい女性フェリーダは、共和国軍の秘密兵器としての役割を担わされていたのである」。こうした思想運動の背景史の中で、今日のトラウマ概念が生みだされることになる。

日本で PTSD(心的外傷後ストレス障害)が注目される契機となった 1995 年の阪神淡路大震災の翌年にジュディス・ハーマン『心的外傷と回復』の邦訳を出版した中井久夫氏は、トラウマを心的外傷と訳した理由について、その「訳者あとがき」で次のように説明している。「『トラウマ』(トローマ)という言葉はギリシャ語の本来の意味である『身体の外傷』から独立して、心的外傷(こころのきず)の意味に『こころの』という形容詞抜きで使ったのは、オックスフォード英語辞典(OED)によれば、一八九四年のウィリアム・ジェームズが最初である。すなわち、この米国の偉大な心理学者によって、英語世界ではすでに 19 世紀に用例がある。しかし、日本語においては、この用例は一九九六年現在、まだ一般に定着しているとはいえず、精神科医、臨床心理学者の内輪の世界にとどまっておき、『外傷』だけでは本書が外科学の本棚に並べられるおそれがあるためである」³¹。このように心的外傷という意味でのトラウマの英語圏での初出は一八九四年のウィリアム・ジェームズによる用例であるということになっている。ところで、ドイツ語圏におけるトラウマの用例をみればフロイトとブローアの共著である『ヒステリー研究』(1895年)の初版序文には「ヒステリーの病因の中では性愛が心的外傷(トラウマ)の根源として、また防衛すなわちある観念を意識から駆逐する動機として主役を演じているというわれわれの見解」³²の証拠を提出することについて患者のプライバシーの観点から不十分であらざるをえないことが弁明されている。この初版序文末尾のブローアとフロイトの署名のある日付は 1895 年 4 月になっているから、フロイト等によるトラウマ概念の登場はウィリアム・ジェームズによる 1894 年のものに遅れていることになる。ところがこの『ヒステリー研究』の冒頭には、1892 年 12 月の日付が付されて 1893 年の『神経学中央雑誌』から再録された「ヒステリー現象の心的機制について」と題された論文が収録されている。そこでは既に、ヒステリー患者が誘因となった出来事とヒステリー症状との間の因果関係に気づいていなかったり、あるいはその体験を記憶していなかったりすることが多いから、催眠術をかけることによってその誘因となった出来事の記憶を呼び覚ますことが必要である、と述べている³³。「外傷性神経症にあって、有効な病因となるのは、むろん区々たる肉体的傷害ではなく、恐怖感すなわち心的外傷なのである。これと同様に我々の研究から明らかになるのは、多くのヒステリー症状には心的外傷と呼ばざるをえない誘因(precipitating causes)のあることである。恐怖、不安、恥辱、心的苦痛のような苦痛な情動を呼び起こすような体験はすべて、心的外傷として作用しうるのである」³⁴。ここに明確にウィリアム・ジェームズに先駆けてフロイト達が、心的外傷という意味でのトラウマ概念を使用していることが分かる。

5. おわりに 『哲学批評』誌とフロイトの精神分析理論の成立およびニーチェへの影響

日本では通説的には、心的外傷は「1895 年 S.フロイトがブローア Joseph Breuer とともに、ヒステリーは心的外傷により生起すると述べたのに始まる」³⁵としている。ところで、英語圏におけるトラウマの初

出をもたらしたウィリアム・ジェームズとドイツ語圏におけるその初出をもたらしたフロイトらとの間に、共通点がある。それはヒステリー研究の家父的存在と云われるフランスの神経学者ジャン＝マルタン・シャルコーに指導されたパリのサルペトリエール病院に留学していたということである³⁶。そしてこの精神病院でシャルコーの右腕的存在として活躍していたのが、後にコレージュ・ド・フランスの心理学主任教授となるピエール・ジャネであり、その群を抜いた詳細極まる調査研究によって最高水準の現代の科学史・科学哲学研究者と認められているハッキングによればサイキック・トラウマ概念の初出をもたらしたのは、この1887年のピエール・ジャネということになる。しかもこのジャネの議論がニーチェの『道徳の系譜』における「心理的苦痛」に関するニーチェの考察に影響を与えていることを、ハッキングは示唆している。「トラウマは、ジャネが心理的トラウマについての最初の考察を、1887年の『哲学批評』に発表した瞬間に心理化された…ジャネの論文は、リボの雑誌『哲学批評』に発表されていたのだから、彼[ニーチェ]がその論文を読んでいても不思議はない。ニーチェはリボそのものは確実に読んでいた。なぜなら、彼は[1887年に執筆した]『道徳の系譜』の中で、リボの『記憶の病』のかなりの部分をほぼ逐語的に使っているからである」³⁷

フロイトは1885年から86年にかけての約五ヵ月間、パリの高名な神経病学者J.M.シャルコーのサルペトリエール精神病院に留学していた。そして1887年にリボの雑誌『哲学批評 (Revue philosophique)』に心理的トラウマの初出が見られるピエール・ジャネの論文が掲載されている³⁸。そして1893年の『神経学中央雑誌』に掲載されたフロイト等の論文および1894年のウィリアム・ジェームズによるトラウマ概念の登場が見られるのである。そしてその1893年のフロイト等の論文でフロイト等の精神分析療法の原型となる催眠浄化(カタルシス)法に關係する先駆例が紹介された論文として三つの著書が紹介されている。それは、デルブフ『動物磁気』(パリ1889年)、A.ピネ『人格の交代』(1892年)、およびP.ジャネ『心理自動症』(パリ1889年)の三著である³⁹。ピネ(Alfred Binet 1857-1911)もまたサルペトリエール精神病院で催眠術とヒステリー研究に取り組んだフランスの心理学者であるが、その『人格の交代』という著書名は明らかに多重人格を示唆している。またその『ヒステリー研究』に登場する症例であり、フロイトの精神分析療法の原型となる「おしゃべり療法(talking cure)」とか「煙突掃除(chimney sweeping)」⁴⁰という名称を生み出した点で精神分析学成立史上必ず言及される重要なアンナ・O症例の場合も、明らかに多重人格症状を示している。実際にそのアンナ・O症例研究において、「患者は二つの人格に分裂しており、そのうちの一つは心的に正常であり、もう一つの方は精神的に病人にいるのだという表現を避けることは難しい」⁴¹と報告されている。

このようにしてみると、第三共和制下においてメスメルやシャルコーの催眠術によるヒステリー研究が多重人格を発見するなかで、ピエール・ジャネが1887年に心的外傷という意味でのトラウマという術語を使用するようになったのである。これをフロイトとジェームズがそれぞれドイツ語圏および英語圏に輸入したのが、トラウマ心理学の成立と伝播の経緯と考えられる。

そして、こうした心理学史の半面で、リボの『記憶の病』(1881年)がニーチェの『道徳の系譜』(1887年)に大きな影響を与えたのであるが、そしてさらにその半面では後年において、フロイトが1900年以降の無意識・前意識・意識という第一局所論から1920年以降のエス・自我・超自我という第二局所論へと変更する際に、G.グロデックの論文の影響を経由して、フロイトはニーチェの用語法「エス」にもとづくことになる⁴²。

ピエール・ジャネの『心理自動症』(1889年)では、既にフラッシュ・バックやさまざまな身体的症状などの症例がとりあげられている。身体的症状は、ヒステリーに典型的で中世以来ともいえる「スティグマ(聖痕)」と、「偶然〔偶有〕の症状(accidental symptoms)」とに分類される。下肢外転筋の拘縮をとまなう両下肢の麻痺というような偶然的症状は、その外傷の原因との象徴的なネットワークの中であって、「事件をどう考えているかによって症状の形が決まる」⁴³。哲学者アンリ・ベルクソンは、同年齢の学友でありまた生涯の同僚となったピエール・ジャネの研究を繰り返し自分の思想に取り入れた⁴⁴。このベルクソンの思想を出発点にして心身論の現象学を展開したのがメルロ＝ポンティであった。後年、「偶然性の感覚というのは、つねに視点が歴史

のどこかの場所に局所づけられているという事実性と有限性の感覚である」⁴⁵と考えたメルロ=ポンティは、やがて「キアスム(交叉配列)の概念とは、存在へのすべての関係はとらえることであると同時にとらえられることであり、とらえるはたらしきととらえられ、書き込まれる、それもおのれがとらえるその同じ存在に書き込まれるのだということである。そして哲学とは、とらえることととらえられることとを、あらゆるレベルで同時に体験することなのである」⁴⁶と書くことになる。そしてメルロ = ポンティは、『見えるものと見えないもの』に納められた晩年の研究ノートの中で、再三にわたってフロイトを参照している。こうしたキアスムとプリコラージュをめぐる思索が、やがてフランス現代思想史において 1960 年代以降におけるアルチュセール(マルクス主義)とラカン(パリ・フロイト派)との間の緊張関係の前提条件を構成することになり、さらにこうした関係が 1990 年代のバルカン半島の悲劇下の現代思想史へと波及することになる。こうして、かつてポール・ジャネらの多重人格運動によって交替したコレージュ・ド・フランスの教授席が占める 2 つの専門的領域、つまり心理学と国際法哲学とは偶然性に導かれて、再び出会うことになる。

フロイトの精神分析理論が「病因論」という因果的決定論すれすれの思考になぜこだわるのか、ということについてはあまり真剣には問題にされてこなかった。19 世紀後半における細菌学のめざましい発展、とくに L.パスツールの細菌学による微生物病因論の基礎が築かれて 1876 年に R.コッホによる炭疽菌の純粋培養による炭疽と炭疽菌との因果関係が明示されたことが大きな影響を及ぼしているとも言われている。従来は、症状で定義するしかなかった病気が、その病気を引き起こす病原菌によって定義できるという理論枠組みが確立したのが、その頃になるからである。因果的決定の起動因たる原因を求めてバイ菌探しの時代が始まるのである⁴⁷。「決定論の侵食」と記憶の諸科学(ハッキング)が隆盛する中で、まもなくベルクソンの影響下でマルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』が書き継がれる時代となり、現代では哲学者リチャード・ローティがこの作品を最大限に評価することになる。

フロイトの精神分析理論は因果的決定論に与する理論なのだろうか?この問いは、ヘーゲルの歴史哲学が因果的決定論に与するのだろうか、という問いとよく似ている学史的理由は、もはや明らかである。問題を解く鍵は、テーマがあの本源的な原因というのをどこからもってきたのか、ということである。そして後に T.アドルノが「対象性の優位」の趨勢を語る時代において、この本源的な原因がトラウマという対象的質料性をもったものとして再登場することになる。

1970 年代のベトナム敗戦のトラウマに苦しんだ米国の精神医学協会は、診断マニュアルの全面刷新に取り組んだ。その結論である 1980 年の米国の精神科診断統計マニュアル第 3 版(DSM)は、病因を問わないで、いくつかの症状が合致すればその疾患とするという、統計的な症状主義であり、操作主義的統計的多軸診断法と言われている。ここ(統計的診断マニュアルの「統計的」)にも因果的決定論から統計的決定論へという科学史の趨勢が現れている。そしてこの第 3 版において心的外傷(トラウマ)後ストレス障害(Post Traumatic Stress Disorder)が「疾患」として掲載されることになるが、しかし、この PTSD だけが、病因を問わない操作主義の例外として「通常の範囲を超えた生活体験(unusual life experience)によって」という原因を規定する一項目を DSM は盛り込んでいた⁴⁸。この例外的な病因論は、実は「心的外傷後(Post Traumatic)」という「疾患名」に付けられた限定的な形容詞に明示されてすらいる。これは因果的決定論なのだろうか。つまり、DSM は、アメリカ精神医学界におけるフロイト主義に対するクレペリン主義の全面的な復興という意味をもちながらも、PTSD という例外においてフロイト主義との妥協という意味を残したとも考えられる。PTSD の PT とは、このほとんど唯一の妥協の指標なのである。にもかかわらず、現代米国のトラウマ研究者によって、フロイトの精神分析理論は「誘惑理論」という因果的決定論を捨てたという罪によって非難されているのである⁴⁹。

(註)

- ¹ 内井惣七「イアン・ハッキング『偶然を飼いならす 統計学と第二次科学革命』」書評、「思想」岩波書店、1999年9月号、No.903、140頁。
- ² Ian Hacking, *The Taming of Chance*, Cambridge University Press, 1990, p.1. イアン・ハッキング『偶然を飼いならす 統計学と第二次科学革命』石原英樹・重田園江訳、木鐸社、1999年、3頁。本稿の訳文では既刊の邦訳がある場合はそれによったが、若干変更する場合もある。
- ³ Hacking, *The Taming of Chance*, p.153. 邦訳、225頁。
- ⁴ Hacking, *The Taming of Chance*, p.154. 邦訳、227頁。
- ⁵ G. W. F. Hegel: *Werke in zwanzig Bänden. Theorie-Werkausgabe.* Suhrkamp (Frankfurt a. M), 1971, Bd.7, §15. なお、『法の哲学綱要』のこの節でヘーゲルが問題にしているのは、意志の偶然性である。
- ⁶ Charles Renouvier, *Essais de critique générale. Deuxième essai. L'Homme: la raison, la passion, la liberté, la certitude, la probabilité morale.* Paris, 1859, p.190f., 335ff., 347ff., 397, 461. なお、ウィリアム・ジェームズがアメリカ心理学協会会長として行った演説では、次のように述べている。「この主題〔努力と意志力〕についての私の学説すべてを、ルノーヴィエに負っています」(William James, 'The Experience of Activity', *The Psychological Review* 12, 1905, pp1-17, reprinted with revisions in *Essays in Radical Empiricism*, New York, 1912, pp.155-88.). Hacking, *The Taming of Chance*, p.153. 邦訳、225頁。
- ⁷ Ernst Cassirer, *Determinism and Modern Physics*, 1936, trans. O. T. Benfey, New Haven, 1956.
- ⁸ Hacking, *The Taming of Chance*, p.151. 邦訳、222頁。
- ⁹ Hacking, *The Taming of Chance*, pp.156-7. 邦訳、230頁。
- ¹⁰ ここには、S. ジジエクの言う「出現の歴史(history of an apparition)」における「満たされることを待っている空虚な場所(the empty place waiting to be filled)」をめぐる「唯物論的転倒(materialist reversal)」を実現する物質=対象(アドルノ「客観性の優位」)が体現(give body)するトラウマ的偶然性(traumatic contingency)の秘密が隠れている。Slavoj Žižek, *For they know not what they do - enjoyment as a political factor*, Verso, London-New York, 1991, pp.156-157. 邦訳 262頁。その結果として、ラカンの後期のテーゼが示したように「大文字の他者は現存在しない」ことになり、私達が現在従っている規則が何かを知らないことになり(宗教的にはゴルゴダの聖金曜日におけるキリストの最後の祈りに関わり、心理学的にはコンプレックス概念にとって本質的でもある無知性に関わる)、S. クリプキが言ったように「梯子は結局は蹴り飛ばされざるをえない」(Saul Kripke, para. 21)ことになり、意味づけの場の生活世界の文脈を支えるのは、常に「あやふやで偶然的なブリコラージュ(やっつけ仕事)(precarious, contingent bricolage)」(Ibid., pp. 153-154. 邦訳 256頁)ということになる。フロイトは、このトラウマ的偶然性の問題に気付いたからこそ初期の誘惑理論を捨てて、その空虚な場所を埋めるためにエディプス・コンプレックス理論を構想したのであるが、フロイトよりも遙かに唯物論的な現代のトラウマ研究者達は、この理論転向をフロイトの裏切り行為とみなして非難しているのである。ここにはまさに唯物論と観念論をめぐる思考の文脈のせめぎ合いがあるのであり、なぜ1960年代後半からのルイ・アルチュセールという唯物論者があれほどまでにラカンに夢中になり、ラカンを自らの「大文字の他者」とみなしたのかということも、こうした「満たされることを待っている空虚な場所」を偶然的に満たしてしまうトラウマ的偶然性を対象性や客観性との関わりの中でラカンが明示しようとしていたという学史的な文脈の中でのみ理解されうる。だから、これらの一連の問題は、初期のヘーゲルが構想した「思弁的聖金曜日の復興」という哲学的プロジェクトから始まったとも言えるかも知れない。「こうしたことを背景として、『諸前提の指定』というヘーゲルのテーゼを思い描かなければならない。事が済んでからのこの指定こそ、まさしく大文字の必然性が偶然性から起こってくる仕方である。主体が『自分の諸前提を指定する』瞬間は主体が主体としては自分を抹消する当の瞬間、主体が媒介者として消える瞬間なのである。すなわち、主体の決断という行為がその反対物に変化する、つまり大文字の歴史に再び直線的進化という自明性を獲得させる新たな象徴界の編み目を確立する閉鎖の瞬間なのである。...主体の行為に続いて主体は見えなくなる 主体は歴史過程の結果として自分自身を位置づけ説明する新しい象徴界のネットワークに自分自身を『実定化すること(positivizing)』により、こうして自分の行為が引き起こした全体性の単なる契機へと自分自身を還元することによって、見えなくなるのである」(Ibid., pp. 190-191, 邦訳 317頁以降)。ゴルゴダのキリストが示唆したように、人間は「自ら為すことを知らざればなり」、この知らず知らずしにしかも偶然的に遡及的に前提される規則を自覚的な知にもたらそうとするソクラテス以来の失敗する試みを自覚的に遂行しようとする点において、精神分析と哲学とは収斂する。
- ¹¹ Slavoj Žižek, *Tarrying with the Negative. Kant, Hegel, and the Critique of Ideology*, Duke University Press, 1993, p.127. ジジエク『否定的なもののもとへの滞留』202頁。ヘーゲル論理学に見られるこの「回顧的な再構成に対して、我々がそれに対してある意味で責任を負うということがある。それらの物語(such narratives)は、けっして単なる所与の事実ではない。このことがフロイトの誘惑理論からエディプス・コンプレックス理論への移行を促した。「銘記しなければならないのは、この『前提の指定』という行為の、最終的な偶然性(the ultimate contingency of this act of "positing the presuppositions")である。フロイトは、「臨床において重要なのは偶然性という要素である」と再三にわたって明記していた。
- ¹² ところで、今日では忘却された道徳に関わる(1)の意味での古典的な道徳的な意志の決定論と、今日もなお反復強迫的に熱狂的に葬送埋葬される(2)の意味でのより近代のともいえる因果的決定論という、この2つの決定論概念が交錯することはないのだろうか？実は、この2つの決定論概念が交錯するところに、「心的外傷」という意味での偶然的トラウマ概念が成立したのである。「満たされることを待っている空虚な場所」を満たすのは、偶然的なトラウマ的マテリア(質料)以外にはなかったのである。具体的にはそれは、次のような経過を経た。ヘーゲル哲学を主観主義的に受容したテーヌの思想系譜の中で、哲学者ポール・ジャネがヘーゲル弁証法を改変しながら心理学を構想し(1860年の論文)、コレージュ・ド・フランスの法哲学の教授ポストを心理学の教授ポストに変更することに成功して、近代フランス心理学の基礎を築いたテオドール・リボがそのポストに就く(1888~1896年)。このリボの弟子にして、かつ哲学者ポール・ジャネの甥であるピエール・ジャネが、このポストの後任者となる。だからピエール・ジャネは哲学者としての教育を受けていながら、しかもやがて若

きフロイトが研修に訪れることになる有名なパリのサルペトリエール精神病院でジャン＝マルタン・シャルコーの右腕として活躍していた。シャルコーが催眠術を使ってヒステリーの治療を行っていたのを見たフロイトはカルチャーショックとともに深刻な学問的影響を受け、催眠術とともに「トラウマ」概念をパリからウィーンに持ち帰ることになった。「トラウマを完全に心理化する境地に向けて突破口を開くには、何が必要だったのか？健忘の原因としての道徳的トラウマという観念は、当を得たものだった。残りの構成要素として不可欠だったのは、ヒステリーと健忘と人格の二重化〔つまり多重人格〕と催眠術に詳しい心理学者だった。そして、ピエール・ジャネこそ、この条件を満たす人物だった(Pierre Janet filled the bill)。彼は、最初は哲学者としての教育を受けていたため、病理学的心理学と実験心理学の領域を扱うことができた。彼の博士論文『心理自動症』(1889年)は、ヒステリーのトラウマの原因を、初めて体系的に研究したものである」(Ian Hacking, *Rewriting the Soul, Multiple Personality and the Sciences of Memory*, Princeton University Press, 1995, p.191. ハッキング『記憶を書きかえる』北沢格訳、早川書房、1998年、237頁。なお「道徳的トラウマ(traumatisme moral)」概念については、ibid., p.183. 邦訳228頁参照)。そして「学問の世界で最高の権威ある地位」(ハッキング)であるコレージュ・ド・フランス心理学主任教授として、1906年にハーヴァードで講演したときに、「〔二重人格症状を呈していたフェリダという〕このつましい女性が、テーヌとリボの師匠の役割を果たしたということ、忘れてはいけません。…フェリダがいなければ、コレージュ・ド・フランスの〔心理学の〕教授職も、…なかったのではないのでしょうか」とジャネが述べたのは、まさに事実を率直に述べたものだったのである。

¹³ H. -A. Taine, *De l'intelligence*. 2 vols. Paris, Hachette. 1870, Vol. 1.

¹⁴ Hacking, *The Taming of Chance*, p.2. 邦訳、5頁。

¹⁵ Hacking, *The Taming of Chance*, p.127f. 邦訳、187頁。

¹⁶ Hacking, *Rewriting the Soul*, p.156, p.158. 邦訳、194頁、196頁。

¹⁷ Hacking, *Rewriting the Soul*, p.163, 邦訳、202頁。

¹⁸ Hacking, *The Taming of Chance*, p.125. 邦訳、184頁。

¹⁹ Judith L. Herman, *Trauma and Recovery*, Basic Books, HarperCollins, New York, 1992. ジュディス・ハーマン『心的外傷と回復』中井久夫訳、みすず書房1996年、7頁。

²⁰ Pierre Janet, *The Major Symptoms of Hysteria* Macmillan, London, 1907, p.78. Hacking, *Rewriting the Soul*, p.159. 邦訳197頁

²¹ Hacking, *Rewriting the Soul*, p.163, 邦訳、202頁。

²² Hacking, *Rewriting the Soul*, p.164, 邦訳、203頁。

²³ Herman, *Trauma and Recovery*. 邦訳、44頁。

²⁴ Hacking, *Rewriting the Soul*, p.164, 邦訳、203頁。

²⁵ Immanuel Kant, *Kants gesammelte Schriften*. hrg. v. der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. Bd. 6. *Die Metaphysik der Sitten*. 1797. Herausgeber: Paul Natorp. 1914, S.224. カント『人倫の形而上学』第一部「法論の形而上学的基礎論」「人倫の形而上学への序論」「人倫の形而上学のための予備概念」。

²⁶ G. W. F. Hegel, *Philosophie des Rechts nach der Vorlesungsnachschrift von H. G. Hotho 1822/23*, hrg. v. K.-H. Ilting, G. W. F. Hegel, *Vorlesungen über Rechtsphilosophie 1818-1831*, Bd.3, Frommman-Holzboog, Stuttgart-Bad Cannstatt, 1974, S.93.

²⁷ Hacking, *Rewriting the Soul*, p.163. 邦訳、203頁。

²⁸ Taine, *De l'intelligence*. Vol. 1, p.16. Pierre Janet, *L'automatisme psychologique: Essai de psychologie expérimentale sur les formes inférieures de l'activité humaine*. Paris, Alcan. 1889, p.244. Allan Young, *The Harmony of Illusions - Inventing Post-Traumatic Stress Disorder*, Princeton, New Jersey, Princeton University Press, 1995. アラン・ヤング『PTSDの医療人類学』中井久夫他訳、みすず書房、2001年、33頁。

²⁹ Paul Janet, Membre de L'Institut, professeur a la Faculte des lettres de Paris, *Etudes sur la dialectique dans Platon et dans Hegel*, Paris, Ladrangé, 1860.

³⁰ Hacking, *Rewriting the Soul*, p.159, 邦訳、198頁。

³¹ ハーマン『心的外傷と回復』、「訳者解説」389頁。

³² J. Breuer and S. Freud, *Studies on Hysteria*, *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. trans. by James Strachey, vol. (1893-1895). Hogarth Press, London, 1955, xxix. フロイト「ヒステリー研究」懸田克躬・小此木啓吾訳、『フロイト著作集』第7巻、人文書院、1974年、5頁。

³³ J. Breuer and S. Freud, *Studies on Hysteria* p.3. 邦訳、9頁。

³⁴ J. Breuer and S. Freud, *Studies on Hysteria* p.6. 邦訳、11頁。

³⁵ 『世界大百科事典』平凡社、1988年、第14巻、「心的外傷」の項、411頁。

³⁶ Herman, *Trauma and Recovery*. 邦訳、8頁。

³⁷ Hacking, *Rewriting the Soul*, p.197. 邦訳、245頁。

³⁸ Pierre Janet, *L'anesthésie systématisé et la dissociation des phénomènes psychologiques*. *Revue philosophique* 23:449-472. なお、P.ジャネの初期の1880年代の論文の多くは、このリボの雑誌『哲学批評』に掲載されている。

³⁹ J. Breuer and S. Freud, *Studies on Hysteria* p.7. 邦訳、13頁。

⁴⁰ J. Breuer and S. Freud, *Studies on Hysteria* p.30, p.265. 邦訳、162頁、188頁。

⁴¹ J. Breuer and S. Freud, *Studies on Hysteria* p.45. 邦訳、175頁、ただしプロイアー報告。

⁴² S. Freud, *Das Ich und das Es*, Internationaler Psychoanalytischer Verlag, 1923.

⁴³ Pierre Janet, *The Mental State of Hystericals, A Study of Mental Stigmata and Mental Accidents*. New York, G.P. Putnam, 1901, p.358, Allan Young, *The Harmony of Illusions*. 邦訳、34頁。

⁴⁴ Hacking, *Rewriting the Soul*, p.251. 邦訳、311頁。

⁴⁵ 鷺田清一『メルロ=ポンティ 可逆性』講談社、1997年、307頁。

⁴⁶ Maurice Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible, suivi de notes de travail*, Gallimard, 1964, p.319. M. メルロ=ポンティ『見えるものと見えないもの』みすず書房、1989年、392頁。

⁴⁷ 現代米国の多重人格運動について、ハッキングは次のようにコメントしている。「多重人格運動を支えてきたのは、アメリカ社会学の徹底的に功利主義的な論評である。社会学は、あるものがただ単に悪いだけで満足はしない。悪いという以上、ある行為が悪い結果をもたらさなければならない」(Hacking, *Rewriting the Soul*, p 66. 邦訳、81頁)。

⁴⁸ ハーマン『心的外傷と回復』、「訳者解説」396頁。

⁴⁹ しかし、メルロ=ポンティ晩年の思索がフロイトを繰り返し参照したのは、むしろこの「罪」ゆえにだったのであり、アルチュセール後期の思索がラカンを繰り返し参照したのもまた、むしろこの「罪」なくしてはありえなかったと考えられる。「そのような素朴な考えの人は、彼の被分析者が現在という時にいるのに、被分析者の過去からの巧妙な説明によって、被分析者を変形することを目指すような<因果論的>分析をためらわずに弁護することによって、彼自身が免れようとしている不安を、彼の語調においてまでもすっかり裏切ってしまう。その不安とは、彼の患者の自由がかれの介入の自由によって、中断されることを考えねばならぬという不安である」(Jacques Lacan, *Écrits*, Éditions du Seuil, 1966, p.251. J. ラカン『エクリ』宮本忠雄他訳、弘文堂、1972年、第1巻、342頁)。ここにおいてこそ「分析」と「自由」との関わりが成立しているが、この問題については、高山守『ヘーゲル哲学と無の論理』(東京大学出版会、2001年)を参照。そしてフロイトが自らの技法をなぜ「精神分析」すなわち「分析」と名づけたのかということもまた、関わっている。この問題はもちろん、直接的にはフロイト自身が吐露しているように自らの修業時代における神経生理学者としての劣等感(トラウマ)の残響によるのだが、間接的にはかつてヘーゲルが『大論理学』「本質論」において「因果命題は分析命題である」という難解な命題を提示していたことに<起因>している。またさらに、J. デリダが反駁した「手紙というものは、いつも送り先に届いている」というJ. ラカンの命題に関わる。先ほどの引用でラカンが用いた「因果論的分析」という用語は、「因果命題は分析命題である」というヘーゲルのテーゼを反映しているのである。もちろんこの反映は、フロイトという迂回路を経由しての反映である。このような「分析」において自由が確保される理論的条件として、ラカンは「象徴界」「想像界」「現実界」の区別を導入するのである。ラカンと同様にヘーゲルとフロイトの影響を受けていたW. ベンヤミンの有名な「歴史の天使」が過去を見つめているのは、因果論的分析を肯定するためではなく、「回顧的に再構成」するためであり、このこと自身を反照するためなのであるが、それでも過去からの風に吹き飛ばされようとしている。フロイトが誘惑理論を捨てて、エディプス・コンプレックス理論へと移行せざるを得なかった背景にあるのは、こうした因果性と自由をめぐる理論的問題であると考えられる。